



写真「生物多様性シリーズⅢ」
アユモドキ

地域でのフィールド調査・研究の情報

生きものがたり

—生物多様性 湖国から 世界から—

私たちの星・地球は、生命の誕生から40億年という時を経て、500万とも3,000万ともいわれる膨大な種類の生きものたちで賑わう「生命の星」です。そして、それぞれの種類の生きものは、他の生きものとさまざまなかわりを持って生活しています。「母なる湖」琵琶湖を抱く滋賀県にも、琵琶湖水系の固有種をはじめとする多様な生きものたちの複雑な世界があります。地域の生きものたちは、多くの歳月をかけてその地域の環境条件に適応し、また生きものたちの顔ぶれも、長い時間のなかで互いに調和的な関係を築けるものが選ばれてきました。生物の特徴の地域性は遺伝子レベルの、種の組み合わせの地域性は種レベルの生物多様性です。このように地域に特有な生物多様性は、歴史の試練を経て形づくられた「自然の遺産」といえるものです。「地域の宝もの」としての価値を認識し、将来の世代へと引き継いでいくことが大切です。

かつて、私たち人間も生きもの的一种として、他の生きものと密接なつながりを持って暮らしていました。私たちの生活が近代化するにつれ、そ

うしたつながりの多くは失われてしまいましたが、それでも、日々の食事に思いをはせれば、生きものたちの命をいただいて生きているという現実気づきます。そして、各地に残されている地域性豊かな作物の品種やそれを利用した伝統食は、私たち人間と地域の生きものとのつながりの多様性を再認識させてくれることでしょう。また、最近では、フクロウの羽の構造やカワセミの頭部の形をまねて騒音や空気抵抗を減らした新幹線の車両など、生きものの特徴を模倣した技術、バイオミクリーも、新たな形の生きもの恵みとして注目されています。

しかし、とくに近代以降の私たち人間の営みによって、少なくない種類の生きものが絶滅しました。絶滅種とされていたクニマスの再発見は嬉しいニュースでしたが、残念ながら例外中の例外です。ニホンオオカミやニホンカワウソは地球上から姿を消し、40年以上確認されていないニホンアシカも絶滅した可能性が高いとされています。そして、その後を追うように、さらに多くの種類に絶滅のおそれがあるとされています。海外では、アフリカゾウやタイマイ、イリエワニなど、商業目的に捕獲されるものもあり、現在ではそれらの乱獲を防ぐため国際取引を制限する条約によって規制対象となっています。また、地球温暖化の進行によりホッキョクグマの絶滅が憂慮され始めています。



常設展示を一步先へ、生きものたちのものがたりをより広く深く紹介します



再発見された絶滅魚クニマスをはじめ、さまざまな実物標本が勢ぞろい

このような危機的な状況のなか、日本では、最も絶滅のおそれが高いカテゴリーのコウノトリや、野生絶滅したトキは、ともに豊かな水田の生物多様性のシンボルとして、野生復帰へ向けた取り組みが進みつつあります。これらとともに、森林生態系の食物連鎖の頂点に位置する猛禽のイヌワシとクマタカは種の保存法の対象種に指定され、滋賀県でも保護指針が定められています。

ここまで見てきたのは、生きものたちの「減りすぎ」の問題です。ところが、最近では生きものたちの「増えすぎ」も見過ごせなくなってきています。その例として、琵琶湖のオオクチバスやブルーギル、コカナダモといった外来種を連想することが多いかもしれません。その一方で、中山間地や農林漁業の現場では、ニホンジカやイノシシ、カワウなど外来種による被害も深刻化しています。とくにニホンジカによる影響は、森林の植生にまで及び、それを食草とする昆虫にまで波及するおそれが指摘されています。

生きものの「減りすぎ」と「増えすぎ」は、どちらも地域在来の生物多様性を脅かす問題であり、私たち人間の活動の影響で生きものの数のバランスが崩れているという点で共通しています。原因を作った私たちは、将来の世代に対してどの



関連イベントとして、屋外展示で「烏丸半島いきもの調査」を始めました

ような生物多様性を残していくべきなのか、その責任が問われています。

ここで紹介した生きものたちをめぐるものがたりの続きは、2013年7月20日から11月24日まで開催される第21回企画展示「生きものがたりー生物多様性 湖国から 世界から」でご覧いただけます。文中で登場した生きものたちも企画展示室に勢ぞろいして、みなさんのお来場をお待ちしています。(専門学芸員 中井克樹)

どこでもだれでもフィールド情報 季節を変えての生きもの観察

田植えが終わり、田んぼの緑がより一層映える頃になると、田園地帯の水路や河川では生きもの観察会を行うところがあり、子供たちはもちろん、大人も交じって子供の頃を思い出しながら、生きもの採集をしている光景を見ることができます。私も観察会へ参加することがありますが、田園地

帯に生息する生きものにとって、豊富な水とあたたかい気候は、産卵・繁殖の時期であり、水路や川の中がにぎわう季節です。

では、冬の季節は、どうでしょうか？水路や河川では春を待ちながら、いろんな生きものが、水路の深みや水草の陰などに隠れて暮らしていま



カワニナを捕食するゲンジボタルの幼虫



冬の時期に採集した体長 15cm のドンコ

す。例えば、初夏の頃に宙を舞っているゲンジボタルは、この時期、水の中でエサとなるカワニナを捕食したり、水路の底にいる魚も泥の中や物陰に隠れているので、タモ網を差し込んで引き上げてみると思わぬ結果に驚くことがあります。

夏場は、軽装で水の中に入ることができますが、寒い冬場は、防寒対策をしっかりと、しかも複数の仲間と安全に調査することが重要です。四季を通して、田園地帯の生きものが知恵をしばらくながら、様々な環境の中で暮らしていることを知ると、さらに生きものに対する興味が湧いてきます。時期を変える、見方を変えることで、新たな出会いと発見があるかも知れません。(専門員 水谷 智)



寒さ対策を万全にして調査に臨む

どこでもだれでもフィールド情報 里山整備とナラ枯れ

滋賀県の里山の代表的な樹木はナラ類、シイ・カシ類です。しかし里山では、これらの木が枯れる「ナラ枯れ」が問題となっています。これはカシノナガキクイムシが媒体となって、病原菌を運んでいる木の病気です。この虫は、高齢木を好んで繁殖するので、利用されなくなった里山林が多くなったことが、原因の1つであると言われています。

放置されている里山林において、上層木を残して中下層木やササを刈払う活動では高齢木が残ります。この結果、カシノナガキクイムシの行動が活発になり、ナラ枯れが拡大する恐れがあります。

昔のように、薪・柴を得るために利用していた里山林では、高齢木になるまでに伐採していたので、このような被害は少なかったと考えられます。

現在では、里山林の整備で発生した木を薪・ペレット等の再生可能な木質エネルギーとして活用していくことが出来ます。

近年では、暖房用の薪ストーブ、ペレットストーブや、給湯用等のチップボイラーが販売され、住宅や施設に設置されています。

身近な里山の整備と併せて、生活パターンを考えていただくきっかけになればと思います。(専門員 安福俊幸)



ナラ枯れ



薪ストーブ



ペレットストーブ



チップボイラー

新しい琵琶湖博物館の創造に向けて

平成8年にオープンした琵琶湖博物館は、リニューアルの検討をすすめています。

開館以来、85万点におよぶ資料・標本を収集し、研究や調査などで多くの成果をあげてきた琵琶湖博物館ですが、これまで大規模なリニューアルを行っていません。そのため、これらの成果を展示で発信し、交流活動も充実していく、新琵琶湖博物館の創造を目指しています。

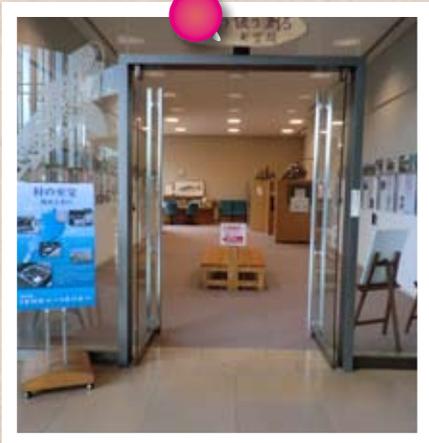
たとえば、収集してきた実物資料をどんどん見せられるようにする、最新の話題や考え方を紹介する、地域の人びとと一緒に展示をつくっていく、参加や体験がたくさんできるようにする…そんなワ

クワクを広げるため、皆さんからもぜひご提案やご意見をお寄せいただきたいと思います。

そして将来、琵琶湖博物館を利用してくださった皆さんが、そのことをきっかけに地域の価値を再発見し、つながりが生まれ、活動の輪が広がっていくことを願っています。(新琵琶湖博物館創造準備室)



将来の琵琶湖博物館の活動イメージ



新空間での展示風景

【資料裏話 その9】 天然水が語る！水との暮らし

かつて、人々の生活用水の水源は、主に湧水や井戸水などといった「天然水」でした。ところが、上水道の普及により、そうした「天然水」の利用や水源への思いも徐々に変化してきました。今もそのような「天然水」源を利用しているところがあるのでしょうか。実際に湧水や井戸水を探してみると、そこにはその地域ならではの水文化がありました。その一部を「湧水と井戸」と題して展示しました（開催期間：2013年2月20日～3月17日）。今回の展示期間はやや短かったのですが、その続きは次年度の企画展示で展開していきたいと考えています。(学芸員 楊 平)

● 編集後記 ●

今年度から「琵琶博だより」を編集担当することになりました。皆様から御意見をいただきながら、よりよい情報誌になるようにしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。(やすふく)

鳥の目 魚の目 クイズ

● 「子どものころは何模様？」 ●

アユモドキは稚魚から幼魚のとき、特徴のある模様をしています。さて、その模様とはなんでしょう？

- ① トラのような黄色と黒の縞模様
- ② ジンベエザメのような水玉模様
- ③ ファッションの最前線？チェック模様

答えは、紙面のどこかにあります。

◆ 巻頭写真の説明 ◆

アユモドキはアユに似ていることから名前がつけましたが、実はドジョウの仲間です。現在は琵琶湖・淀川水系と岡山県にのみ生息していますが、産卵場所や生息環境の悪化により個体数が激減しています。琵琶湖博物館ではアユモドキの系統保存を行なっています。